

# 特集

## 《12》

### 座談会／横浜みどりアップ計画

#### これまでの10年間と今後への期待／市民推進会議発

——今日は、これまで横浜みどりアップ計画の評価や提案、広報などを行う「横浜みどりアップ計画市民推進会議」の委員や元委員の方にお集まりいただきました。この計画の10年目の節目に、これまでの取組を振り返りつつ、4月からスタートする3期目の新たな計画への期待や、未来に向けた緑の保全について、それぞれの立場からご意見などをいただけたらと思っています。よろしくお願ひします。

#### ■自己紹介／みどりアップの取組との関わり

【**蔦谷**】 進行役の蔦谷です。よろしくお願ひします。はじめに自己紹介とともに、市民推進会議、あるいはみどりアップ計画との関わり、活動の中で感じたことなどについてお話をいただきたいと思ひます。

市農業を中心に研究をしています。その流れで、市民推進会議にもご縁をいただき、現在は、「農を感じる」施策を検討する部会（注1）の部長をしています。

今は個人で看板を掲げ、都市農業だけに限らず、国民全体が農との距離を縮めていく、「国民皆農」ということで、国民一人ひとりがその農との距離をいろいろな形で縮めていく、参画をしていくような、そういう世界、「農的社會」を広げていきたいという事で活動をしています。

それでは、東さん、お願ひします。

【**東**】 私は市民推進会議の市民公募委員として、広報・見える化部会で、このみどりアップの取組を市民の皆さんにどう分かりやすく伝えるかということをこの5年間やらせていただきました。元々は、水源の森づくりや地産地消の食育といった市民団体の活動を続けてきましたが、その経

験から、私たちにとって横浜の緑や農を今後どう活用していけばよいか、どう楽しむのかという目線を持って委員をやらせていただきました。また、みどりアップの取組は、私たちの税金を使ってこの森を守る、農を感じる、緑をつくるということですので、横浜みどり税を使うということをどのようように評価できるのかという目線を常に忘れないようにやってきましたつもりです。活動の中では、同じ市民としていろいろな方にみどりアップの取組について尋ねる機会もあったのですが、市民の意識は高く、緑を守るため

だったら税金を少し多く払ってもいいという方が半数以上いらっしやいますので、横浜は行政の取組も進んでいます、市民の意識も優れています、その上でみどりアップの取組は成り立っているのだなと、この5年間で実感しています。

【**蔦谷**】 続いて望月さん、お

願ひします。

【**望月**】 私は、横浜みどり税の導入に深く関わる横浜市税制調査会の委員をさせていただいており、同時に、この市民推進会議の「森を育む」施策を検討する部会の部会長と、広報・見える化部会の委員をしています。このみどりアップ計画の立ち上げのときから横浜みどり税を税制調査会で審議しましたので、この10年を振り返ることで、私の感想とさせていただきたいと思ひます。

横浜市というのは、開発が非常に急速に行われ、急速に緑が失われていったという状況がありました。しかし、元々横浜は、非常に水と緑が豊かで、それが市民生活にとって望ましいことであるのではないかと、緑をきちんと守っていくことが市の重要な施策の一つであるという市民の皆さんのご要望に相應る形で、このみどりアップ計画ができたものと理解してい



内海 宏  
（株）地域計画研究所 代表取締役  
元・市民推進会議広報部会専門委員



東 みちよ  
横浜みどりアップ計画市民推進会議  
委員

ます。当初は、いかに横浜の緑の減少を食い止めるかということに主眼が置かれていたという気がしていますが、横浜みどり税を市民の皆さんに負担していただくと同時に、それに応える施策を進め、この10年間で目に見える形で成果が出て来ているのではないかと思います。緑の保全はかなり浸透し、農とのふれあいの場も格段に増えてきていますし、さらには最近やっとなりてきたように、緑をつくるという施策にまで展開がすすんでいます。市のレベルでこのような計画に取り組むというのは、日本の中でも稀有なことであろうと思っていますし、これを今後更なる成果が得られる形で実行していくことは、多分世界的なレベルでも関心の高い課題であろうと思っています。

【鳶谷】ありがとうございます。それは、内海さん、お願いします。

【内海】第一期のみどりアップ計画のときに、広報部会の委員をしていましたが、いかに成果を見える化するか、実感が持てる施策展開にしなければいけないことを考えながら関わらせていただいています。それ以降は、みどりアップ計画そのものには

直接は関わっていないのですが、みどりアップ計画の柱(注2)の3「市民が実感できる緑をつくる」の中の地域緑のまちづくりの事業に参加する地域の伴走支援を行っています。緑化というのは植えただけでは終わりではなく、それを維持管理する活動が大仕事になりますので、裾野がほとんど広がらないと結局は担い手がなくなってしまうと思います。したがって、お年寄りだけではなくて、多世代、親子も参加して自分たちの住宅地を快適にする、そういう視点で関わっています。

私は元々は都市計画の専門家ですが、市内の中でも農村的な所で育っているものから、住宅地が住宅だけが密集した姿というよりは、樹林地や農地が共存したような住宅地のイメージを都市計画という立場で実現したいという思いが非常に強くあります。その延長線上で農業関係のコンサルティング調査や大学での講義などもしてきています。

■市民の皆さんに緑の取組の成果を伝える、見える化する【鳶谷】内海さんは、市民推進会議から若干距離を置いて活動をご覧になっていたわけですが、この10年のみどりアップ

計画、市民推進会議の状況については、どのように評価されていますでしょうか。

【内海】第一期のときは、広報も本当に手探りで、実際にみどりアップの施策を展開した現場に行くことも少なかつたです。行った成果をどのように見せるのか、議論しながらという感じでした。特に一番難しかったのは、緑地を買うことの成果が見えにくいということ。この樹林地を買えました」と言ってもなかなか伝わらないので、当時は、例えば地球温暖化防止にも役立っていることを具体的データ、あるいは図、写真の類で見せていくことなどを少しづつ行っていました。それに比べると、最近の広報はそれよりも進展しているなと感じています。

しかし、依然として、みどりアップ計画の柱の1「市民とともに次世代につなぐ森を育む」については、お金の使われ方も一番大きいのですが、まだまだ成果が実感しにくいようにも感じています。3期目ですので、買い上げたところの緑の意義や、自然観察をはじめ利活用のことなど、なかなかデータで示されるぐらいでは分からないところをどうしたら実感でき

るところまで持つて行けるかが、大変大きな課題だったと思います。

【鳶谷】柱の1に限らず、どういう形で成果を市民の皆さんに伝えていくのか、どう見える化をしていくのか、大変大きなことだと思います。

【望月】内海さんが指摘をされたとおりで、特に第一期のときは事業も始めたばかりですし、ましてや森の保全という10年、20年、場合によっては100年くらいかかって成果が出るものを短期間で市民の皆さんに理解していただくというのは非常に難しい課題であったと思います。2期目に入って、森の保全のためにこれだけ買収をして、それで森が守られていますと、データは示すことができるようになったのですが、市民の皆さんの実感できる形というところまではなかなかいかないというのがあります。それは柱の1だけでなく、柱の2、柱の3も共通する課題であると思います。ただ、第2期においては、東さんが広報の部会長として、この緑の取組がどのようになされているかということを市民の目線できちんと伝えていきたいよねと、非常に身近なところの緑の活用状況をお伝えすると



望月 正光  
横浜みどりアップ計画市民推進会議  
委員



鳶谷 栄一(進行)  
横浜みどりアップ計画市民推進会議  
副座長



ということが広報方針でしたので、その意味では、それまで私たちが気がつかなかったようなところまで写真をうまく使いながら伝えるようになりましたので、広報として一歩も二歩も進めたように思っています。

【東】この広報誌「みどりアップQ」は、横浜みどり税を使って実際にみどりアップの取組をしているその場所で活動をされている方たち、緑のボランティアの方や農家の方だったり、愛護会の方だったり、そうした方たちに、その人なりのご苦労やその人なりの展望みたいなものを語って

【東】実際の活動に関する記事が中心で、作成は結構大変だろうなと思って見ていました。

【東】この広報誌「みどりアップQ」は、横浜みどり税を使って実際にみどりアップの取組をしているその場所で活動をされている方たち、緑のボランティアの方や農家の方だったり、愛護会の方だったり、そうした方たちに、その人なりのご苦労やその人なりの展望みたいなものを語って

【東】クエスチョンの「Q」です。みどりアップ計画って何とか、やはり言葉だけは広がっているのですが、実際のところ理解をしていない市民の方たちもまだまだいらっしやいますので、そういう方たちに分かりやすくその疑問を知っていただくための「Q」でもあります。

【東】広報の果たす役割というのは大変重要で、その取組自体は着実に進めてきたと思いますし、大分良い線まで来ているように実感しています。

【東】そうですね。最初に市民推進会議の委員になったときには、緑をいかに減らさないか、今ある緑をどう残していくか、樹林地の指定などが一番の目標とっていました。が、実際の状況を見ると、ただ緑を残すだけではなくて、例えば、最近の自然災害などを考えると、安心して暮らすためには、そこが避難地になったりですとか、きちんと樹林の手入れをすることでがけ崩れを防ぐとか、そういった災害防止という意味もあつたり、あるいは気候変動というところをいくと、街路樹とか、木陰をつくるとか、温度を下げる機能もあつたりと、緑は実は都市の中ではすごく大事なもののなんだと思うようになりまして。ただ面積を確保するだけでなく、街の中にどういった緑をどこに配置したら暮らしが良くなる、住み良くなるのかという、緑の質というところもすごく大事だと思われました。そういう多面的なみどりアップというものも

【東】お話を伺っていて思ったのですが、緑政策ということになっていきますが、実際に行っているのは緑農政策なんですよ。通常は農業政策があつて、他方で林業政策があるのですが、みどりアップ計画はこれを緑農一体として捉えながら政策体系をつくっている。市民の目線からすると、サービスの受ける、享受するのも市民なのであつて、自分たちの暮らし、健康、環境にとって、緑農がいかに関与しているのか、そういうものがみどりアップ計画の中に含まれているのだという感じがします。

【東】私は、横浜の都市というものは、市街化調整区域が穴抜きのように郊外に点在し、点在しているところには緑地と農地が挾点的に残っている。その間の白いところが実は住宅地や商店街が



【東】私は、横浜の都市というものは、市街化調整区域が穴抜きのように郊外に点在し、点在しているところには緑地と農地が挾点的に残っている。その間の白いところが実は住宅地や商店街が

【東】私は、横浜の都市というものは、市街化調整区域が穴抜きのように郊外に点在し、点在しているところには緑地と農地が挾点的に残っている。その間の白いところが実は住宅地や商店街が

【東】私は、横浜の都市というものは、市街化調整区域が穴抜きのように郊外に点在し、点在しているところには緑地と農地が挾点的に残っている。その間の白いところが実は住宅地や商店街が

【東】私は、横浜の都市というものは、市街化調整区域が穴抜きのように郊外に点在し、点在しているところには緑地と農地が挾点的に残っている。その間の白いところが実は住宅地や商店街が

【東】私は、横浜の都市というものは、市街化調整区域が穴抜きのように郊外に点在し、点在しているところには緑地と農地が挾点的に残っている。その間の白いところが実は住宅地や商店街が

【東】私は、横浜の都市というものは、市街化調整区域が穴抜きのように郊外に点在し、点在しているところには緑地と農地が挾点的に残っている。その間の白いところが実は住宅地や商店街が

辺りが非常に難しいという気がしてしまいました。望月さん、いかがですか。

【望月】私のように財政の専門家からいくと、その背景にはかなり面倒な議論があることはありますが、簡単にポイントだけ説明をさせていただきませう。本来ですと、通常の行政を行う中で、市民税なり固定資産税なりで緑を守る施策を行うことになりましたが、横浜の場合には、市民の皆さんのご希望が更により良い環境に満たされた横浜市をつくらうということ、そのために、横浜みどり税という特別な税を負担していただいて、それに応える特別な施策として優れた環境を維持していくということになっています。専門的な言葉で「超過課税」と言うのですが、「通常の税とは違って普通の税に乗せずる形で市民の皆さんや法人の皆さんに負担していただくということになりますので、特別な負担をしている成果が市民の皆さんの実感を伴うものであることが必要です。この点が、横浜みどり税の特徴であり、難しいところもあるのですが、その成果をきちんと市民の皆さんに伝えていくことが課題であると思っています。

ます。

【葛谷】私は「農を感じる」施策を検討する部会をやっていて常々思うのですが、国の農業政策は生産なり所得の問題に全て還元をして評価をしているわけですが、横浜で取り組んでいる一番象徴的な例は、水田の保全だと思っています。水田を保全することに対して奨励金を支払っている。市民が保全することを欲している、それを守るんだという、そこが前面に出てそこに奨励金を充てていく。これは私は国の政策とは違う、非常に横浜らしい施策だと思っています。生産の競争原理とは別のところで、農業の存在自体、農地の保全そのものを訴えていく、そういう政策も必要になってくると思いますし、農を感じる施策として、日本の農業、農政の中でも非常に着目しているトライアルをしているのではないかなと思っています。そういっていいかなと思っ

と思います。このような会議はなかなか無い仕組みだと思うのですが、市民推進会議を改めてどう評価するのか、望月さんから話しただけですか。

【望月】市民推進会議を市民の目線で行政を見ていくという視点で考えると、この会議の果たす役割はとても大きいと思っ

ています。みどりアップQという市民目線の広報誌を発行し、より市民の皆さんに分かりやすく実感できる形で実態がお知らせできるということがあると思いますし、市民が考えていることを言葉として行政に直接届けられるという組織にもなっています。今後、この市民推進会議がどのような役割を果たしていくかというのを改めて考えていくこともあると思います。少なくとも横浜みどり税という超過課税を実際に行っている、この税の使い方がどういう成果をもたらしているかというのを市民の目線で見たい、私なりに実感できているというのが正直な思いです。

くなると思われま

【葛谷】横浜みどり税導入と市民推進会議がはじめからセットで位置づけられていたんですね。

東さんは、市民推進会議についてはどのように感じていましたか。

【東】そうですね。望月先生や葛谷先生のように税や緑政、農政の専門家がいらっしやる中で、市民公募委員の私たちは決して専門家ではなく、ただ何かしらの活動はしています。全く付度しないです。笑。です。こんなこと言っ

てはいけません。本当に自由で発言させていただいていますので、風通しのよい会議だったと思っています。【葛谷】これはやはり座長の進士先生のお人柄なども大きいと思うのですが、確かに自由闊達でいいですね。盛り上がりを見せていつも時間が足りなくなる会議です。そして、この市民推進会議が重要な役割を果たして来られた最大の背景にあるのは、市民の力というか、市民力があつたことだと思

います。内海さんは、市民推進会議についてどのようにご覧になっていますか。

【内海】市民の目線で本

当に付度なく思ったことが言える、やっぱりそれが市民推進会議の生命線かなと思います。何か全体で合意するという場面では、またちよつと別の問題もあるかもしれませんが、思ったことが言えるということはやはり非常に大事なところ

です。横浜の市民力ということで、地域緑のまちづくり事業で実際に支援をしていると、中には、地域に移り住んだばかりのマンションの住民の親子が発議をして、それを3年間やっていたらネットワーク型の緑化活動になったというモデルができた、いろいろなバリエーションが出てきて、横浜の市民です。ごいなど実感することもあります。活動を維持するためのお金がないとなると、苗生産まで自分たちでやってみようというところも出てきて、やっぱりすごいですよ。事業が終わっても、きちんと自前で継続できるような工夫まで仕上げるところが結構あつて、その市民力には驚かされます。その意味では、市民推進会議は、緑農施策が市民目線で見ているかに適正に実施されているかを検証する役目が大事になります。

【今後の課題、方向性

【蔦谷】 それでは最後に、みどりアップの取組について、今後の課題や方向性について話をお願いしたいと思います。すでに成果の見える化などのお話も出ていますが、あらためて一言ずつお願いできればと思います。東さん、お願いします。

【東】 私は、やはり緑をつくっていくということは、それは人がつくるものですので、“人づくり”というところもすごく重要だと思っています。どのような緑をつくりたいかとか、ビジョンを持って私たち市民がどう動くのか。市民推進会議もその一つかもしれないが、みどりアップ計画で“人づくり”というところも何か取り組んでいっていただきたいなと思っています。

【蔦谷】 望月さん、お願いします。

【望月】 緑をいかにつくっていくのかということが、おそらくこれからの重要な課題になると考えています。横浜の場合にはやはり都心地域、横浜駅の周りとか、緑をあまり実感できないところもあります。緑が少ないと言われている地域、区に、いかに緑豊かな市民生活を実現していくのか、市民の皆さんの声を聞いて、どのように緑をつくっていく

かというのが、多分一番大きな課題になると考えています。単に環境創造局だけの課題ではなくて、横浜市全体の取組として、どういう形でまちづくりをしていくか、そこにみどりアップ計画をどのように関連させていくのか、大きな課題だと考えています。

【蔦谷】 内海さんはいかがですか。

【内海】 私もやはり緑をつくっていくということが非常に大事であると思っています。横浜もいよいよ人口減少社会を迎え、空き家が非常に増えてきます。老朽化の進んだところは、それを壊して、私なんかは農だ、農だって言っていますが、農地に土地利用を戻したり、オープンスペースとして何かに使うような新しいことをやらないと、街が荒れたり、草がぼうぼうになったり、荒地地になったり、そういう状況が生まれてきます。私はそういう意味では、今ある農地をいかに維持するかというのは、農家だけで維持できない事態にもあるので、そこは市民の力で残す。維持するところと、出てきた荒地地、空地を農地、緑地でもいいのですが、戻すようなことをこれからきちんとやっていかなければいけないと考え

ています。横浜みどり税の性格も、今ある緑を守るというところから、もう一度元に戻すというか、それもただ昔に戻れというのではなくて、新しい形で甦らせるような形に展開していくのかなと、そんなことを考えています。市民推進会議も、そのような運動を提唱するような側面があってもよいのではないかと考えています。

【蔦谷】 最後に私も一言。私も大体皆さんと一緒にですが、やはり質の向上をもっとやっていく必要があると考えています。今までは面で覆いながらカバーしていき、そこから先は緑をつくっていくということになります。物理的につくっていく部分のほかに、質を改善していく段階に入ってきていると思います。いろいろ議論があるかもしれませんが、自然の生態系を生かした形で負荷をかけない農業だとか、あるいは緑地の改善だとか、有機的というか、オーガニック的というか、そういう視点、感覚というのを入れていく時代ではないかなという感じがしています。イタリ

アなどを見ますと、最近の地域づくりというのは、要するに、農業だけだとか、文化財だけだとかではないんです

ね。地域を丸ごとどうしていくのか、その中で農業にどう取り組んでいくのか。いろんな自然環境を含めて持続的なまちづくり、あるいは市民が参画できる、市民が主役のまちづくりをどうやっていくのか、横浜でもそういうことを視野に入れてやっていってもいいのかなと、そういう感じがしています。

市民力のお話もありましたが、市民力はどうも横浜が先頭に立って走っているように受け止めています。横浜がみどりアップ計画なり、市民推進会議を軸にしながら、一つのモデルとなつて、全国を引っ張っていっただけじゃうれしいと思います。

今日はいろいろ貴重なご意見をいただきました。ありがとうございました。どうぞございました。

（注1）横浜みどりアップ計画市民推進会議は全体会議のほか、次の5つの部会を設置している。  
・「森を育む」施策を検討する部会  
・「農を感じる」施策を検討する部会  
・「緑をつくる」施策を検討する部会  
・広報・見える化部会  
・調査部会

（注2）横浜みどりアップ計画（計画期間：平成26～30年度）は、次の3つを取組の柱としている。  
取組の柱1 市民とともに次世代にたく森を育む  
取組の柱2 市民が身近に農を感じる場をつくる  
取組の柱3 市民が実感できる緑をつくる

